

雑誌「サンガ・ジャパン」でまるごと一冊「チベット仏教」の特集が組まれた。序には「チベット仏教のエッセンスを取り出すことをめざしている」とある。その結果、チベット仏教の全体像が俯瞰できる手ごたえのある一冊となつて、ずしりと重く、私の両手の中にやってきた。たとえてみるなら、これはチベット仏教の滋養たっぷりの大きなブドウの房だ、と読み始めてそう思えた。二十数名の執筆者の個性が際立ち、それぞれの専門性を生かした哲学的考察から、各宗派とボン教の解説、ブータンのGNH、最近の文学や映画のムーブメントまで、一粒ひと粒の品種も味も異なっているところが飽きさせない。濃い紫、透き通るような赤紫、翡翠にも喩えられる宝石のような輝き、と目移りがするほど。それが全部、ひと房で味わえるのだ！ブドウ好きには、いや、チベット仏教好きにはたまらない。

巻頭にはアメリカで見たチベット仏教の現在形を語る藤田一照老師と永沢哲氏の対談、そして、日本在住のニンマの高僧・ニチャン・リンポチェへのインタビュー。この2本だけでも、相当に読みごたえがある。ここでこの特集の根っこにあるものが指し示されている気がした。一つは「智慧と慈悲」を両輪とするチベット仏教の現代的意義という社会的なテーマ。もう一つは個人の生き方としての「幸福を追求する」チベット仏教だ。2つは、実は同じこととして結びついていて、その実践者としてダライ・ラマ法王の存在はまさにチベットの精神のあり方を象徴している。ニチャン・リンポチェは一人の仏教徒としてのあり方をインタビュー

の「答え方」の中にあらわされた。注意深い読者なら、それに気づかれ、ポンと膝を打つことだろう。

さて、11月にはダライ・ラマ法王の灌頂があり、複数のラマの来日も予定されていると聞か

が、このように日本でチベット仏教を根付かせようとする人々の努力や、日常生活でチベットの智慧を生かそうとする人々の広がりへの支えになるようなこととはナンナノカ？テラワダの伝統を持つ「サンガジャパン」がチベット仏教にも深いまなざしを向けたことで、ここから新たに開かれてゆく道が予感される。精神性の伝統と社会のかかわり方を考えるすべての人々への問いかけとして、この一冊は本当に面白い位置にある。チベット仏教の、日本での可能性、そこに目を向けるとき、本書はとても重要な役割を果たすだろう。それだけに虹色に輝く美味なる数粒を発見する楽しさからこぼれおちてしまったいくつかのグループや、日本とも縁の深いリンポチェの紹介などがなかったことが惜しまれる。編集に約2年半をかけたという関係者に敬意を表したい。と同時に、補足版として新たな一冊が編まれることを期待したい。開かれた動き、開かれた場から、風が動き、光が射し、精神文化の花が咲き実りますように！ 梅野 泉



永沢 哲監修 サンガ
766頁 2016年8月
2800円(税別)